

山本麻子著「ことばを鍛えるイギリスの学校—国語教育で何ができるか」Ⅱ 岩波現代文庫 岩波書店 2012年12月14日刊を読む

I ことばの重視と英国の伝統

1. (1) こうしたことを通しても、母語としての英語はすべての基本、という英国の教育の一面を垣間見ることができるだろう。
(2) とかく英国では、英語がよくできることが論理的な思考の持ち主であること、すなわち、頭がよいということと同一視されがちだ。
(3) 英国の国語教育は単に読み書き能力の助長だけでなく、公の場で個人として独立した意見を筋道を立てて、まとまりとして、述べたり書いたりすることを重視している。
(4) しかも、
 - ① 聞き手、読み手などを意識して、人前では決して他人を中傷したりしない、
 - ② 反対意見は人を傷つけないように上手に言ったり、書いたりする、
 - ③ 人の考えや述べたことを引用するときにはその情報源を必ず出すなどといった言語ルールも小さいときから教える。
そのための技術や能力を子どもたちが身につけることに学校教育の焦点があるのだ。
2. このような方針のもととなっているのは、英国の教育に対する社会通念の一つに「子どもは話すことによって学ぶ」ということがあるからだろう。
子どもは自分の知っていることについて、皆の前で話したり、他の子どもと議論することによって学んでいくと考えられている。こうした通念があるので、親も教師も子どもがなるべく皆の前できちんと話すことを奨励しているわけだ。
教師と議論したり、子ども同士で意見を交換したりすることがとても大切だとみなされている。聞くことももちろん重視されているが、あとで話したり質問をしたりするためにきちんと聞くことがよいとされているのである。
3. (1) エドワーズという教育学者の著書によると、英国の「話すことによって学ぶ」という考えのもとには、ピアジェ、ヴィゴツキー、ブルーナーなどの教育心理学者の主張が影響を与えているという。
つまり「学習」という行動は社会と深く関わっているということ、その中でも「話すことと聞くこと」が中心的な役割を担っているということだ。
(2) こうした見解によると、教師の役目というのは、子どもが学習するための、いわば足場を作ってやることのようなのである。

足場というのは建造物を作るに当たって築くものであるが、建物ができあがってしまえばはずされる。

(3)それと同じように、よい教師とはある時点で引き下がり、子どもが自分の学習には自分で責任を負うように指導していくものだと考えられている。

(4)そして、子どもたちの学習のための最も効果的な「足場」作りとは、エドワーズによれば、具体的には次のような行動で示されているという(Edwards, 1995)。

4. (1)子どもたちが口に出したり、行なったりしたことを、教師が実際に使い、それをもとにしてその後の計画を立てる。
 - (2)なぜ、ある特定の活動をするように教師から指示されたかを子どもに自分で理解させる。
 - (3)子どもの話し合いに頃合を見て、教師が割り込み、口をはさむことによって、子どもたちが新たに発見したり、また、失敗の原因がわかるようにする。
5. (1)このようなものを見ると、英国の教師は大変な技量がなくてはならないように思えるが、理想的な教師はそんなにいるものではない。
 - (2)それでも、こうして、**子どもたちの言語能力を育むためにより足場作りをしてやる技量**が**どの教師にも期待されている**ということは確かなようだ。

P.64 ~ P.66

II 全国で行われる「トーク」

1. (1)イギリスの学校では、ナショナルカリキュラムに書かれているためか、「どこかの段階で、テーマを決めてきちんと段取りを踏んだスピーチやトークの練習をする」ことがある。
 - (2)息子たちの通った初等学校では毎年、八、九歳の子どもたちに対して、人前での話の試験が実施された。ジュニア部からミドル部に移行するためにだれもが通るプロセスである。子どもたちは講堂で校長や他の教師、同学年の友人の前で、三分間自由なトピックでトークをするのだ。これは恒例行事になっていて、校長が三日間かけてすべての生徒一人一人の話を聞き、それぞれ総合的に一から五までの評価をした。トークのトピックは各自で選ぶが、虫、恐竜、サッカー、飛行機の歴史、医学の歴史など、さまざまだった。
 - (3)三人の息子たちはそれぞれ、「車の仕組み」「ロケット」「ブラックホール」をトピックにした。上の息子たちの時には、渡英後一年しかたっていないで英語もままならず、また、学校を変えたばかりで準備の時間も少なかったのだが、やればできるものだとつくづく思ったものだ。
2. (1)トークのためには、題材を決めてから内容の原稿を作成する。また、聞き手の内容理解を助けるための視覚材料として、縦 70 センチ、横 50 センチくらいのハードボードに自分で

描いた絵や写真を貼って用意したりもした。そしてそれを参考にしながら、メモを見ずに、三分間の発表となるのである。

- (2) トークの評価は話の構成と話し方の二点である。話の構成は序、中心部、結びといった、ステップを踏んでいるかどうか、話し方については、流暢さ、声の大きさ、スピード、説得力があるかどうかといった点が考慮された。三分間のトークのあと、質疑応答の時間もとられ、校長や他の先生や友人からの質問を受けるが、そのときの対応の仕方も評価に入る。
- (3) 話の試験そのものは五月の中旬に行われるのだが、テーマ選びはかなり早い時点でなされ、十分準備ができるようにと配慮されていた。四月のイースター休暇中に原稿を書き、発表の練習をしておくことになっていた。

3. (1) このトークというものには、「原稿を書く」ことと「人前で話す」ことのほか、原稿を作成するに当たって「調査をする」ことの三つの要素が入っていることがわかる。いわば、小プロジェクトを実行しているようなものであった。
- (2) そして、実際のトークはもちろん子どもがするのだが、作業のどの段階でも親が監督したり協力したりすることが前提となっていた。
- (3) 学年末の行事の際に、トークに使われた発表用のハードボードが多数展示されていたので、大体他の子どもたちがどんなトピックについて発表したかを見ることができたが、親がかなり手伝った様子がよくわかった。

4. (1) こうした、人前で発表するという訓練は、中等学校に行ってからも続く。
- (2) 息子の一人が十三歳のとき、「現在生きている英国人で、今の英国社会に大きな影響を与えている人」というテーマでやはり三分間のトークをするという課題が出たことがある。友人たちの多くは政治やビジネスの世界で有名な人を選んでいるようだったが、息子は当時注目を集めていた教育相について話すことに決めた。この教育相の発言の内容だけでなく、生い立ちが興味深かったということもあるようだ。
- (3) まず、インターネットのホームページや種々の新聞から情報を集めたが、そのあたりは親も少し手伝った。それからは自分で原稿を書き、先生に見てもらい、発表した。一週間ぐらいですべてを完成するというものだったが、やはり、トピックの選択、リサーチに基づいた原稿書き、人前での発表という段取りを踏んでいた。

Ⅲ 「積極的に」聞く

1. (1) ところで、スピーチやトークを「聞く」側の児童や生徒も、ただ受身的に聞いていることを前提とはしていない。
- (2) ナショナルカリキュラムでは、「聞くこと」自体についても「話すこと」と同じ程度に高遠な目標が掲げられ、個人の思考の発展のために役立てることを目的としている。

(3)たとえば、五歳から七歳の子どもを対象とした指導事項として、以下のようなものがある。

2. (1)児童は注意力を持続させるように、そして、興味をもった特定の部分を覚えているように促されるべきである。聞いたことに対して、後で的確に反応したり、他の者の反応も聞くようにと教えられるべきである。また、自分がその問題について本当に理解しているかどうかを確かめるために質問したりするように指導される必要がある。

(2)また、七歳から十一歳までの学習段階での指導事項には次のようなことも含まれる。

①説明や議論の主要部分が何であるかがわかり、聞いたものを評価する。

②児童は注意深く聞くとともに、聞いた議論や、話、発表、ラジオやテレビの番組などの主要論点を後で他の者に紹介することを学ぶ。

3. (1)さらに、十一歳から十六歳までの時期には、「注意深く聞く」ということはさらに重要視され、たとえば、「黙って静かに聴いていなくてはならない」という状況から、「即座に回答しなければならない」という状況までいろいろな機会が与えられることが望ましいとされるし、次のような事項もある。

(2)①他の意見に対して建設的に聞いたり反応したりすることを学ぶ。すなわち、自分の意見とは違った見解があることがわかり、その見解に照らし合わせて自分の考えを修正したりすることを学ぶ。

②意味には、ストレートで明白な意味と、暗示的な意味とがあることを学ぶ。

③グループ内で、他の者に対して適切に反応し、自分の考えを述べたり質問したりすることにより、種類の違った妥当な貢献ができるようにする。

4. (1)こうして見ると、「聞く」という作業は、ただ話し手が言うことをそのまま受け入れるために聞くのではなく、「話す」作業の一環として、または「話す」目的を達成するために「聞く」ことが奨励されているということがよくわかる。

(2)話を注意深く聞くことによって、それが自分の考えとはどこが違うかを明らかにできるのだし、それをもとにしてコメントを加えたり、批評したり、議論を結論に導いたりすることができるので、積極的に聞くことは重要なのだ。

(3)こうした一連の作業は、究極的には個人の考える力を育むことになると思われている。

P.80 ~ P.84

<コメント>

イギリスの教育では、「読むこと」「書くこと」と同時に、「話すこと」「聞くこと」も大切にされていることがよくわかる。4技能はバランスだけでなく、「深み」も追求している。日本の課題は何かを考えたい。

2020年12月5日(土)